

インダス文明の都市と王権

宇野 隆夫

国際日本文化研究センター

はじめに

世界の初期文明の中で、インダス文明は重要な位置を占めている。その一般的な理解は、インダス文明の都市が盛期ハラッパ期（2500-1900BC 頃）に繁栄したというものであり、初期ハラッパ期（3200BC-）を都市文明段階に含める考えも珍しくない。

インダス文明はインド西北部からパキスタンにかけて、およそ東西 1200km、南北 1500km に及ぶ広大な領域をもち、ユーラシアの多くの文明・文化と交流関係をもった（図 1）。それは旧大陸を特徴づける青銅器時代の古代文明の一つであり、そのことは都市形成という点に端的に表れている。その都市的な特色としては、大型のもので総面積が 100 ヘクタールを越える規模の大きさ、城塞（Citadel）と市街地（Lower town）の区分、城壁による防御、装飾品（ornament）を代表とする各種の手工業生産・交易の発達などが、明らかにされてきている。



図1 インダス文明の位置と周辺の諸文明・文化（紀元前 3000 年紀）

ただしインダス文明の都市においては、大型の建物はあるが、神殿や王宮と推定できるものが未発見であること、王墓のような卓越した個人の存在を示唆する資料を確認できないことが大きな謎とされてきた。また銅・青銅のナイフ・ヤジリなどが若干存在するものの、攻撃用武器があまり発達しないことも、インダス文明の大きな特色である。

このようにインダス文明の都市を営んだ仕組みの解明が、現在もインダス文明研究の大きな課題である。インダス文明都市の本格的な調査例は未だに少なく、そのさらなる解明は今後の調査の進捗に待たなければならないところが多いが、本論では、従来知られている資料をもとに GIS（地理情報システム）分析を用いつつ、この課題に取り組みたい。

1 インダス文明の地形環境

インダス文明の地形環境を知るために、SRTM3（NASA が配布する 90m メッシュ DEM, デジタル・エレベーション・モデル）上に、インダス文明の遺跡分布、および本稿でとりあげる主要遺跡の位置を示した（図 2、当該地域の新石器～鉄器時代の遺跡を表示した。地図は暖色であるほど標高が高いことを示す）。

インダス文明遺跡の領域は広大であるが、その地形は比較的シンプルであり、主にインダス平

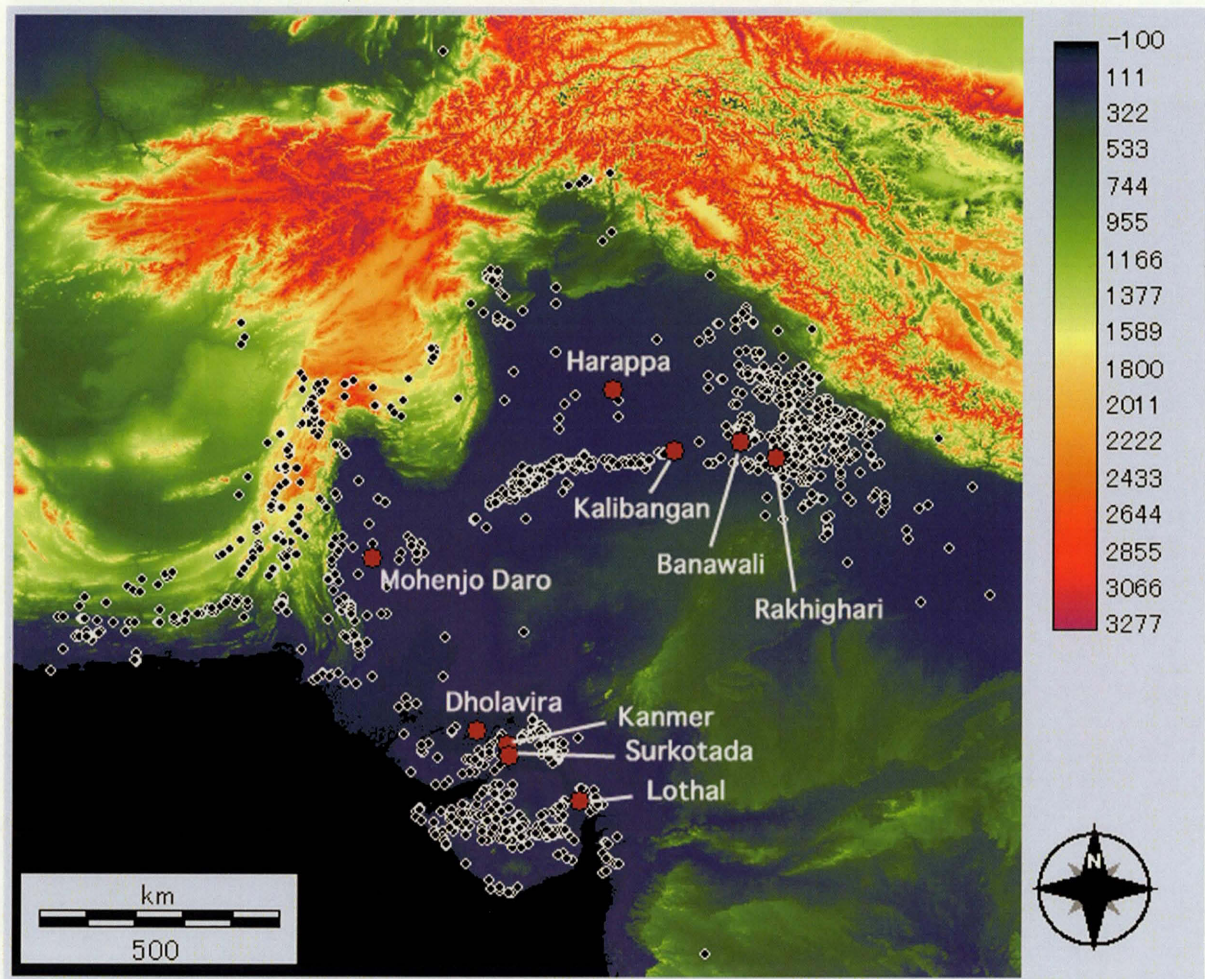


図 2 インダス文明の地形環境と遺跡分布 (DEM)

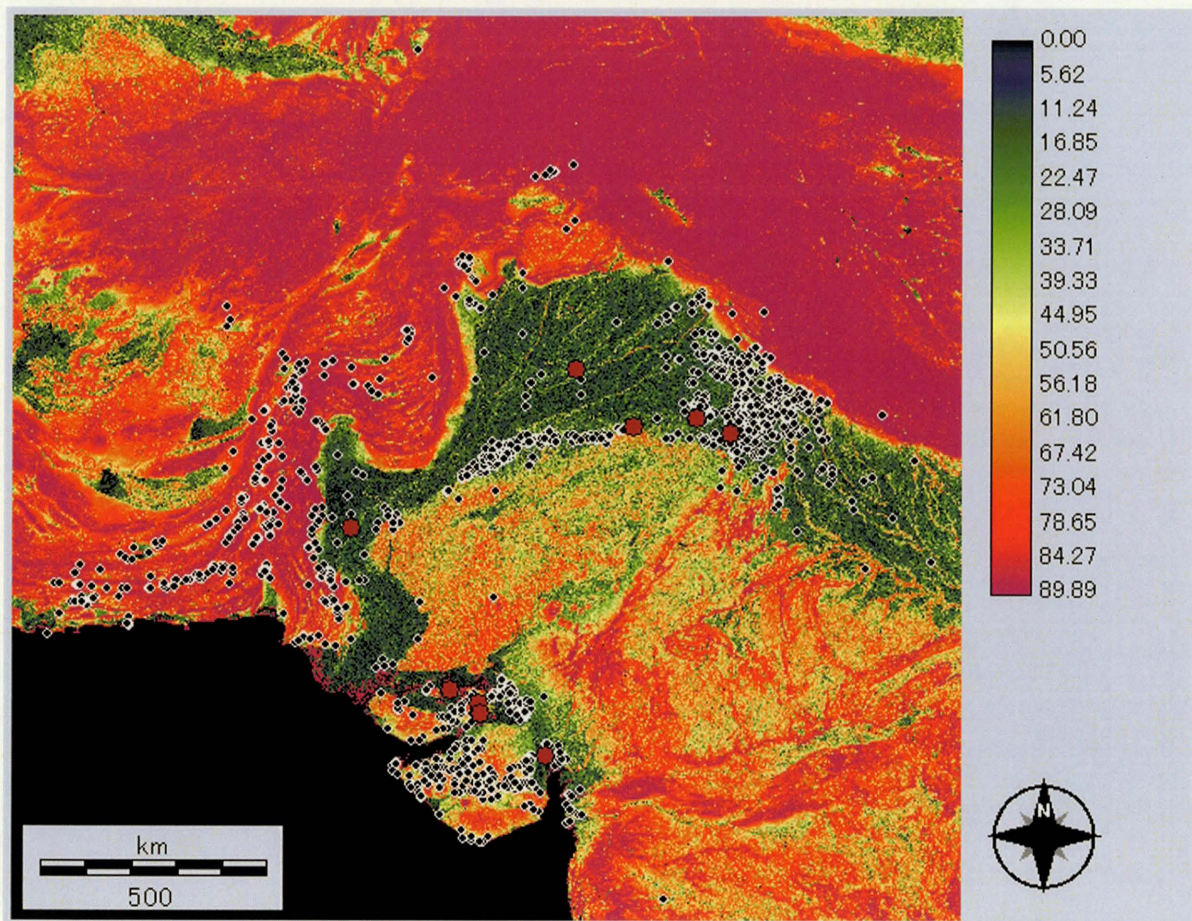


図3 インダス文明の地形環境と遺跡立地 (Slope Model)

原、その周辺の丘陵・山地、アラビア海に面した海辺という三種類の地帯からなっている。なおインダス平原には、インダス川が流れ、またその東南にガッガル・ハークラー涸河床が存在するが、ガッガル・ハークラー涸川はヴェーダに記録されるサラスヴァティー涸川に相当する可能性が高いものである。

インダス文明の地形環境をさらに分かりやすくみるために、スロープ・モデル上に遺跡分布を示した(図3、暖色であるほど地形傾斜が急であることを示す)。インダス平原がインダス川中流域でくびれて上流域と下流域の平野に分かれること、インド西北部・グジャラート州一帯では海岸線が入り組み、インド北部のインダス川・ガンジス川境界域が独立した遺跡が集中する平野であることをみることができる。

このような平野と周辺丘陵・山地がまとまる地形と、後述の遺跡の密度分布分析の成果から、インダス文明を以下のように、四地域に大別しておきたい(図4)。

第Ⅰ地域 (パローチスタン丘陵・インダス川下流域)：当地域で最初に遺跡形成がなされた西部パローチスタン丘陵域とインダス川下流域平野およびその周辺の低丘陵域。このインダス川下流域平野の中央に、インダス文明の標識遺跡であるモヘンジョ・ダロ Mohenjo-Daro 遺跡が、所在する。

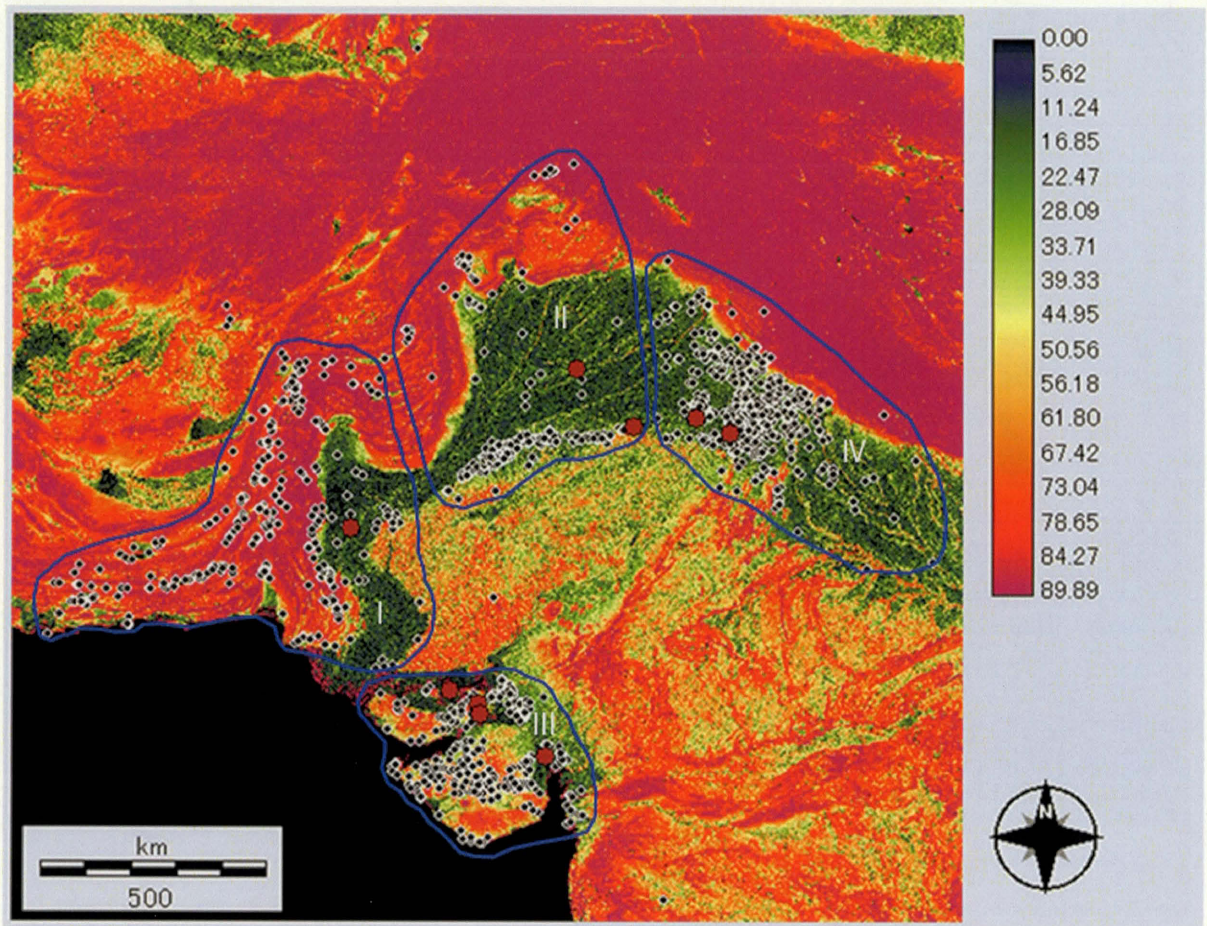


図4 Slope Modelと密度分布分析に基づいたインダス文明の地域区分

第II地域（インダス川上流域）：インダス川上流域の平野とその周辺丘陵・山地域。この平原の中に、インダス文明のもう一つの代表的な標識遺跡であるハラッパー Harappa 遺跡がある。このインダス川上流域平野の東南部にはガッガル・ハークラー川が西南流して、その流域に多くの遺跡が密集する。このガッガル・ハークラー川流域はインダス川流域と区別して扱われることが多いが、遺跡群の盛衰はインダス川上流域の遺跡群と一致し、本稿では当群がインダス平原を囲む丘陵裾に立地し、平野の遺跡群と一体的なものと評価している。

第III地域（グジャラート）：インド西北部のサウラシュートラ半島を中心とする海辺の地域。他の地域と違って、小規模な丘陵・平野が入り組み、いくつかの地形単元に細別することが可能である。

第IV地域（インダス・ガンジス川流域の上流境界域）：インド北部のヒマラヤ山脈裾部に広がる平野である。ハラッパー遺跡やモヘンジョ・ダロ遺跡とならぶインダス文明の大遺跡であるラーキーガリー Rakhigari 遺跡が所在する。地形的には当地域の西部はインダス平原と連続し、東部はガンジス川上流域であって、独特の地形単元をなしている。インダス文明後半期を中心とする遺跡が密度高く分布する地域である。

2 インダス文明の主要遺跡

上で述べた地域の区分に沿いながら、インダス文明の主要遺跡の概要について述べる（表1）。なおインダス文明の都市の規模について、ケノイヤーはおよそ50ヘクタール以上の第1級都市、10-50ヘクタールの第2級都市、5-10ヘクタールの町、1-5ヘクタールの村、1ヘクタール以下のキャンプ・サイトに5大別している（Kenoyer 1998）。また都市構造については、小磯学が城塞と市街地が分離しているものと一体のものに2大別した（小磯1998）。本稿でも、基本的にこれに沿って検討しつつ、若干の私見を加えたい。

表1 インダス文明の主要遺跡（面積はKenoyer 1998による）

遺跡名 1	遺跡名 2	時期	面積 (ha)	参考文献
Harappa	ハラッパー	Cemetery H, Transitional, Mature Harappan, Transitional, Kot diji, Hakra/Ravi	150+	Vats 1940, Meadow 1991a
Mohenjo-daro	モヘンジョ・ダロ	Jukar, Mature Harappan	250+	Marshall 1925-26: 74, Marshall 1931a, Mackay 1937-38, Anonymous 1964: 38-39, Flam 1981a: 239-40
Kalibangan	カーリーバンガン	Mature Harappan, Sothi-Siswal	12	Tessitori 1918-19: 23, Stein 1943a: 49-52, Joshi et al. 1984: 520
Dholavira	ドーラヴィーラー	Mature Harappan, Amri-Nal	100	IAR 1967-68: 17, Possehl 1980: 97, Joshi et al. 1984: 529, Bisht 1989, 1991
Kanmer	カーンメール	Medieval, Mature Harappan	1.3	IAR 1985-86: 19, Osada et al 2007
Surkotada	スールコータダー	Mature Harappan, Early to Mature Harappan	1.7	IAR 1964-65: 12, Possehl 1980: 116, Joshi et al. 1984: 528
Lothal	ロータル	Late Sorath Harappan, Mature Harappan	7	Rao 1963a: 206, Rao 1979 & 1985, Possehl 1980: 108, Joshi et al. 1984: 530, 535
Rakhighari	ラーキーガリー	Mature Harappan, Sothi-Siswal	80+	IAR 1963-64: 90, Suraj Bhan 1975: 95-101, 124, IAR 1980-81: 16, Joshi et al. 1984: 520
Banawali	バナーワリー	Post-urban Harappan, Mature Harappan, Early/Mature Trans. Sothi-Siswal	16	Suraj Bhan 1975: 123, Bisht 1982, Joshi et al. 1984: 519, 521, 526

第I地域

Mohenjo-Daro（モヘンジョ・ダロ）遺跡：パキスタン・シンド州、インダス平原の南半部インダス川下流域の中央に位置するインダス文明の標識遺跡である（図5・6）。西に城塞（沐浴場のマウンド, Mound of the Great Bath）、東に市街地（Lower town）がある。遺跡の堆積層は厚さ約22メートルに及び、新石器時代から盛期ハラッパー期まで存続した。この地区のマウンドの面積は55ヘクタールであるが（小磯2004）、周辺に遺跡が広がり、ケノイヤーは250ヘクタール以上と推定している（Kenoyer 1998）。

インダス文明の都市の中でモヘンジョ・ダロ遺跡は、最も広く調査されていて、城塞からは沐浴場、穀物倉、僧侶の大学と呼ばれる、性格は不明であるものの、公共建築物と推定できるものが存在する。沐浴場は1800平方メートル、穀物倉は1350平方メートル、

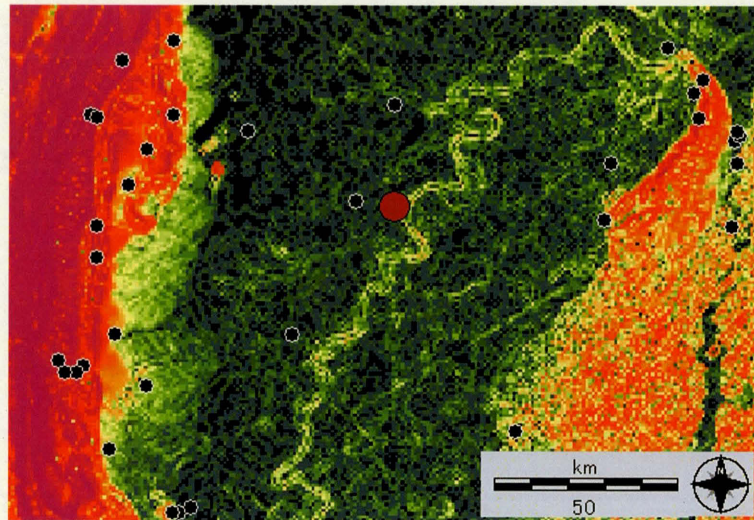


図5 モヘンジョ・ダロ遺跡の立地

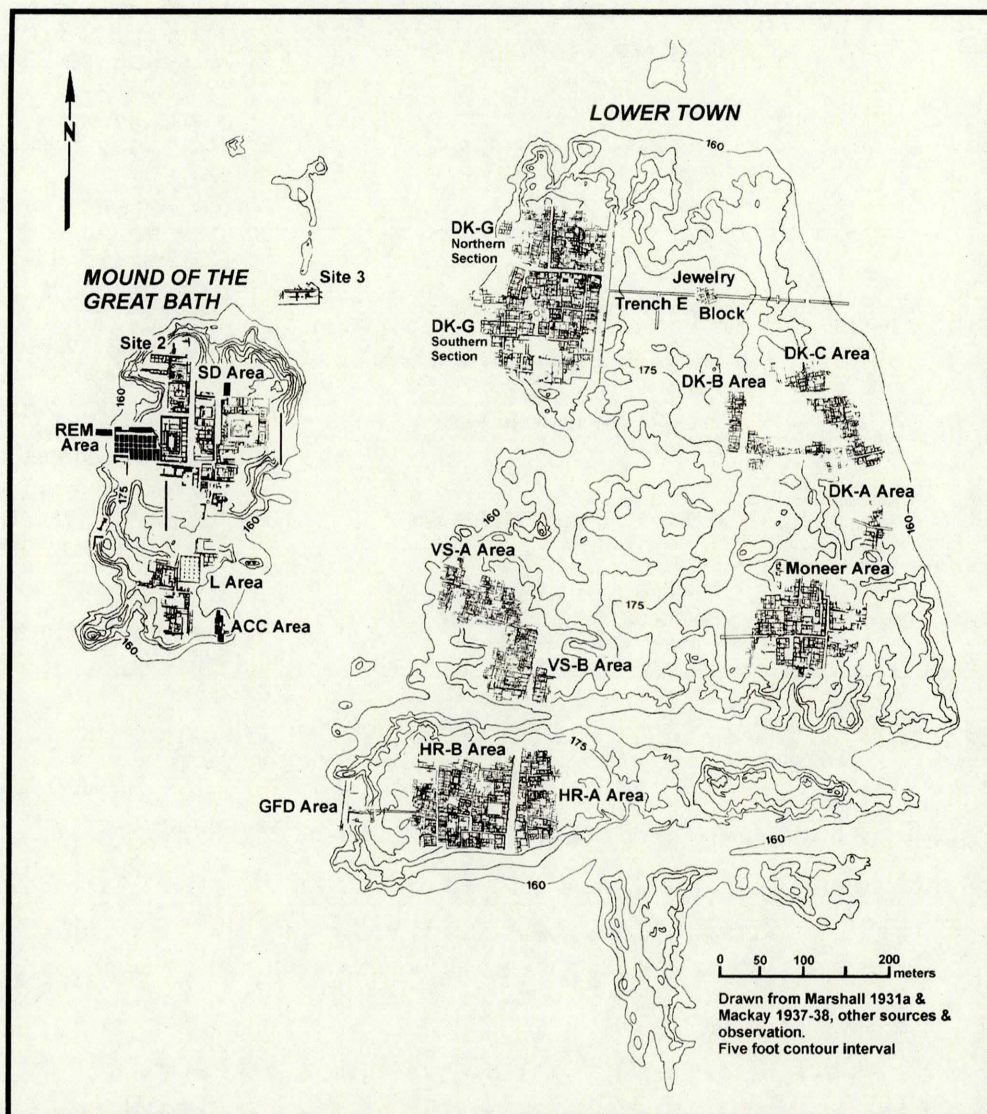


図6 モヘンジョ・ダロ遺跡平面図 (Possehl 2002)

僧侶の大学は約 1700 平方メートルの大型建物からなる。

市街地は、格子状（碁盤目状）の道路配置があり、下水道が完備している。ここには、およそ 50 ～ 200 平方メートル・平均約 100 平方メートルの多様な一般住宅が多数存在する一方で、1000 ～ 2000 平方メートルの大型建物も少なからずあり、その性格の解明が都市統治機構の解明に直結すると指摘されている（小磯 2004）。

第 II 地域

Harappa（ハラッパー）遺跡：インダス平原北部のほぼ中心、パキスタン・パンジャブ州、インダス川の支流であるラーヴィー川左岸に位置する第 1 級の大型都市遺跡である。地形的には大平原の中にあり、遺跡の北にラーヴィー川の旧河道が近接してある（図 7）。

当遺跡は最初に確認されたインダス文明の標識都市であり、当該文明をハラッパー文明と呼ぶことも広く行われている。新石器時代から、後期ハラッパー期まで長期にわたって存続した。都市域は、前期ハラッパー期に拡大して城壁が出現し、盛期ハラッパー期に城塞と市街地が分離した都市構造が確立した（図 8）。すなわち遺跡の西部にある東西約 200m 南北約 400m の平行四辺形の城壁と門をもつ AB マウンドが城塞であり、その西南と北のマウンド E・マウンド ET・マウンド F が市街地である、また城塞の南には R-37 墓地と H 墓地がある。現在のマウンドの面積は 100 ヘクタール弱であるが、マウンドの周辺にも遺跡が広がり、ケノイヤーは 150 ヘクタール以上の規模と推定している（Kenoyer 1998）。

ハラッパー遺跡の顕著な遺構としては、城塞では 2 列に並ぶ床面積約 800 平方メートルの穀物倉と脱穀場かとされる直径約 3.5 メートルの円形作業台が 18 基あり、マウンドの F の職人の住宅などがある。これらの建物の正確な性格は未解明であるが、「穀物倉」や「円形作業台」は城塞に特徴的な施設であり、都市の経営と関わるものと、推測されている。

カーリーバンガン（Kalibangan）遺跡：インド・ラジャスターン州に位置して、ガッガル・ハークラ川河床の南に隣接する。インダス平原の中というよりも、インダス平原を囲む丘陵の裾部に立地していて、遺跡が帯状に分布する範囲の東端に位置している（図 9）。

カーリーバンガン遺跡には、初期ハラッパー期と盛期ハラッパー期の 2 段階があり、盛期ハラッパー期には、西にある平行四辺形の城塞と、東にあるやはり平行四辺形の市街地からなっていた（図 10）。城塞は南北の 2 地区に分かれて、その南の地区からをはじめとして火を使用した祭祀跡が発見されている。城塞の南西には墓地があり、市街地の南からは、畑と推定される、初期ハラッパー期の畝状遺構がみついている。

第 III 地域

インド・グジャラート州を中心とする海辺の地域である。アラビア海に突き出したサウラシュートラ半島は丘陵を中心とする地形であり、その西北部のカッチ地域、その東部のパール地域の三つの地域に細別できる（図 11）。

海水面変動シミュレーションによると、盛期ハラッパー期にはカッチ地域のラン・低地には、海が入り込んでいたと推定できる（Teramura and Uno 2006）。すなわち、カッチ地方のドーラヴィーラー遺跡、カーンメール遺跡、スールコータダー遺跡は、島に立地した港町と推定できる

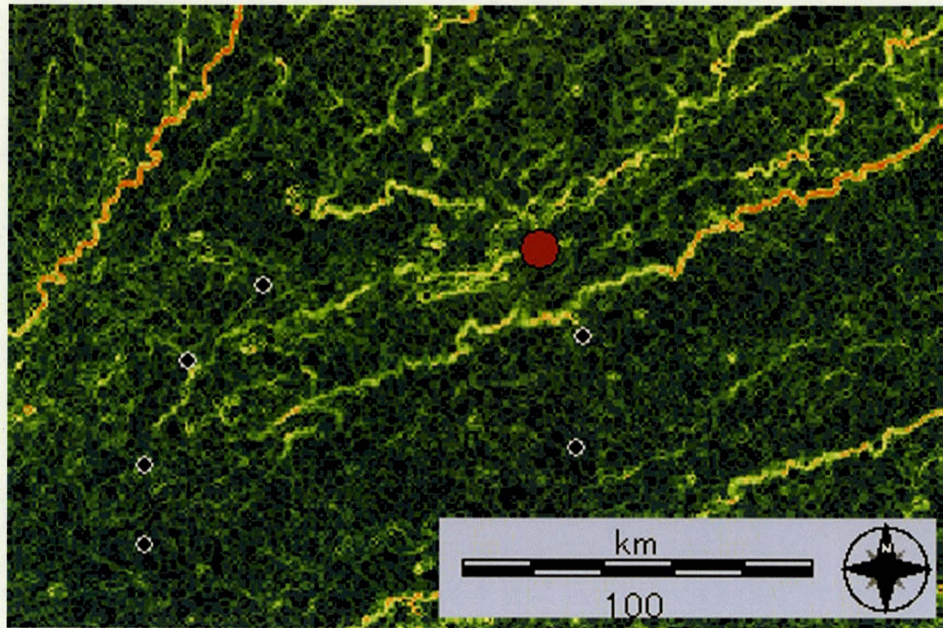


図7 ハラッパー遺跡の立地

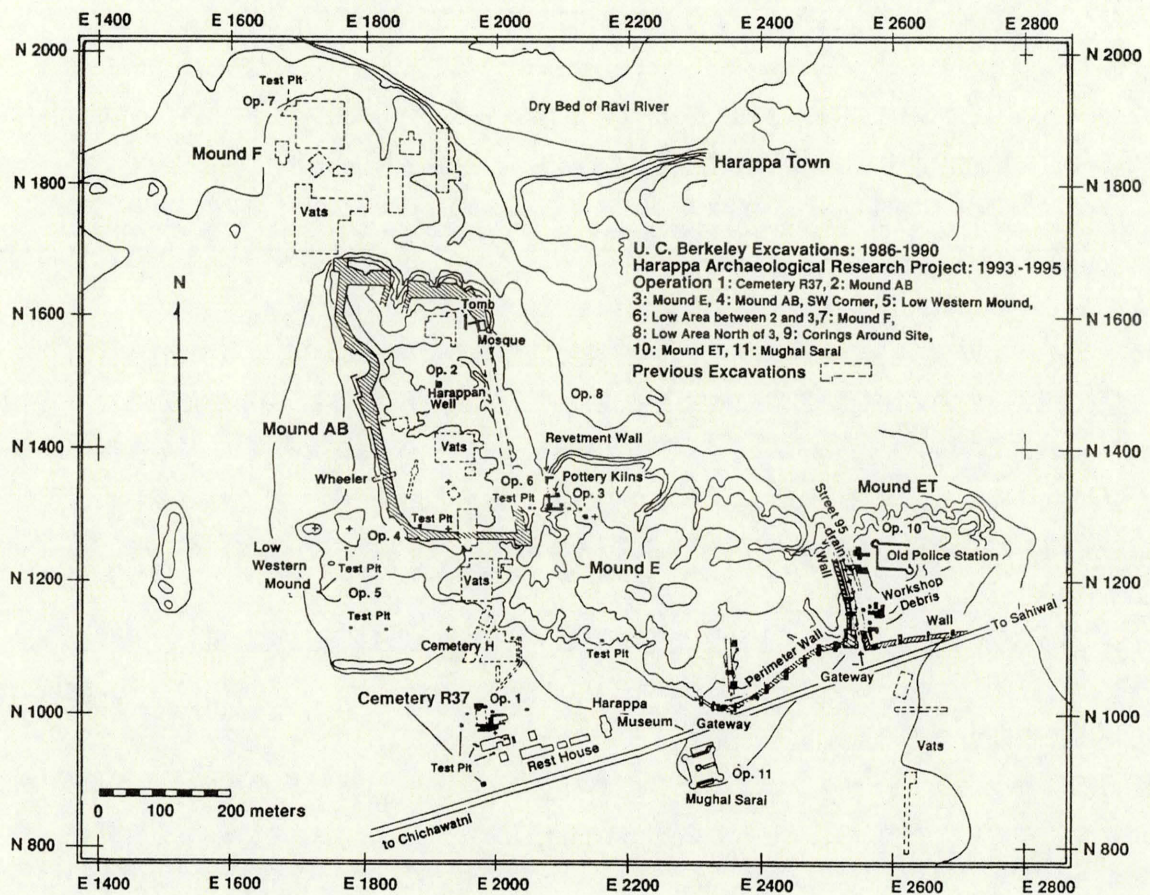


図8 ハラッパー遺跡平面図 (Meadow and Kenoyer 1997)

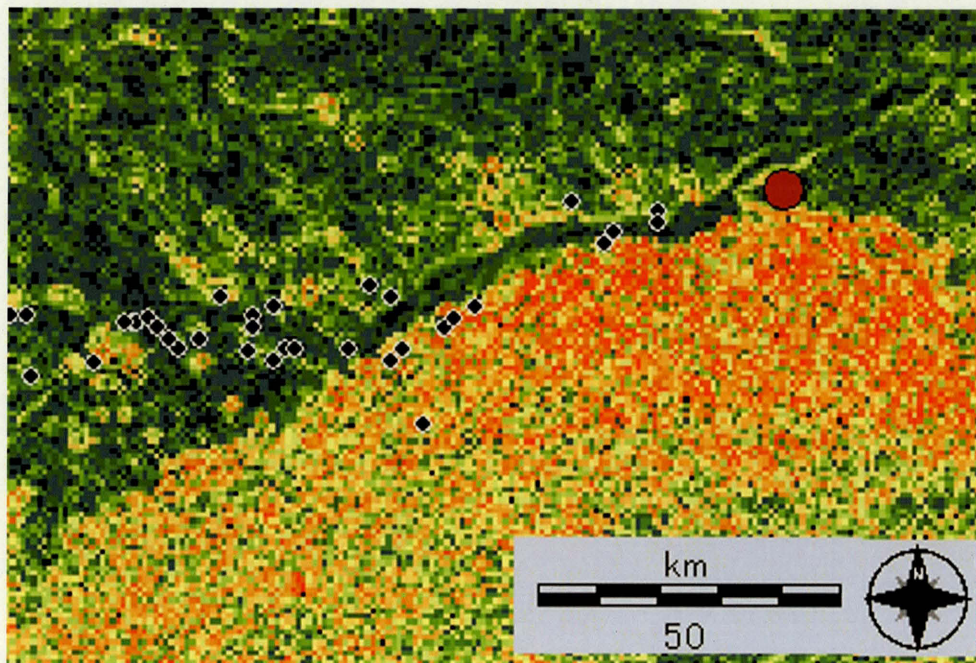


図9 カーリーバンガン遺跡の立地

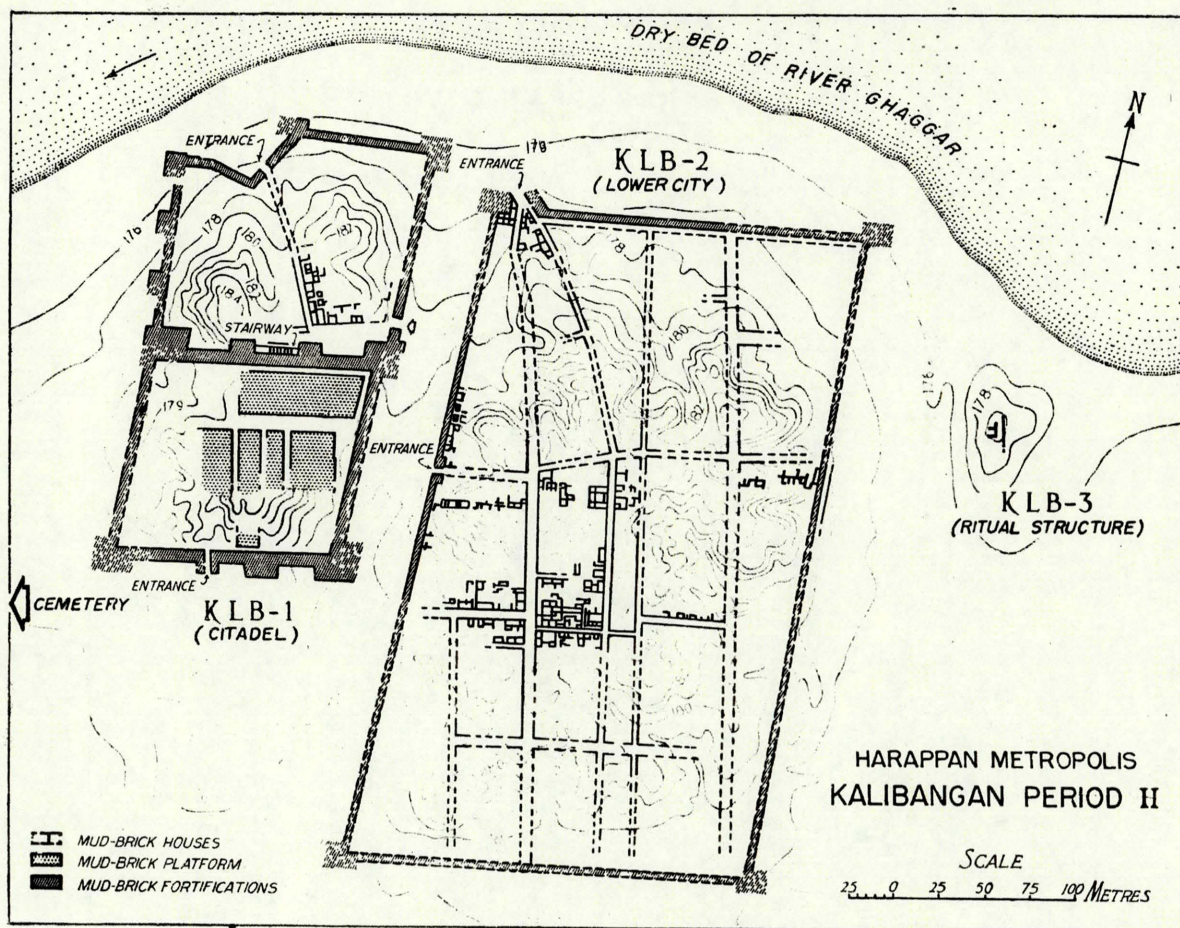


図10 カーリーバンガン遺跡平面図 (Sharma 1999)

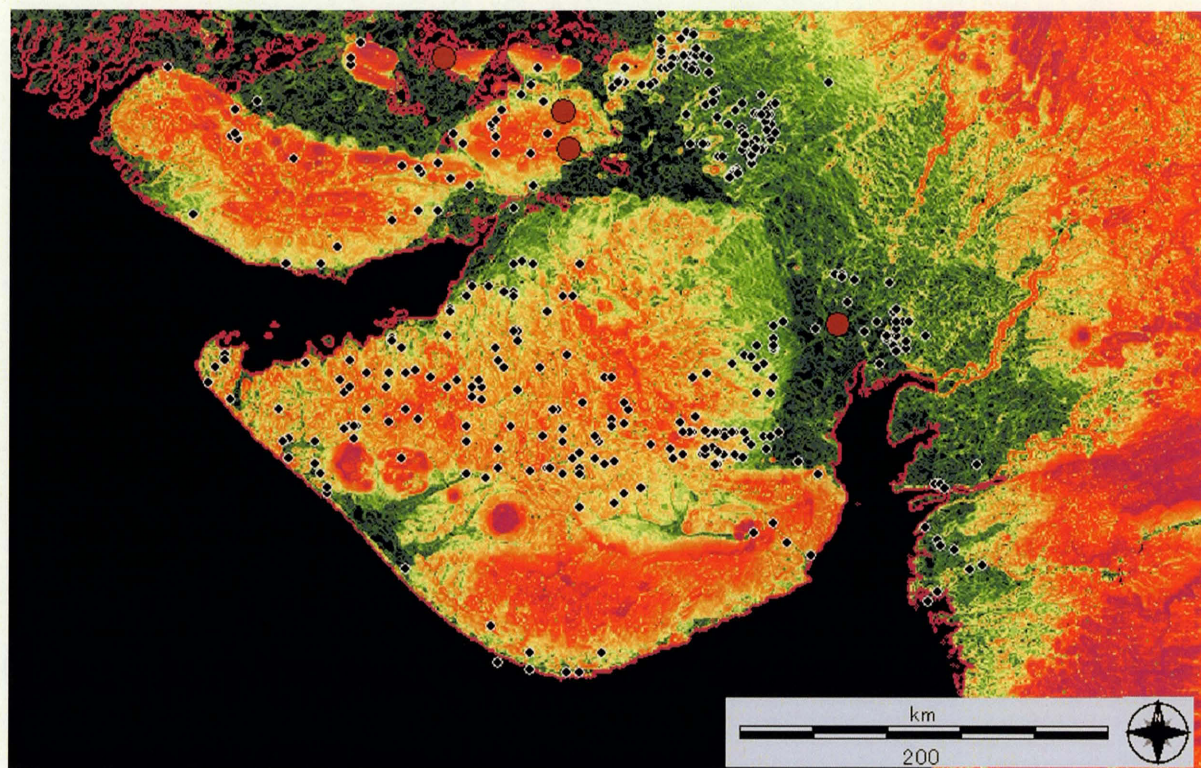


図11 グジャラート地域の遺跡立地

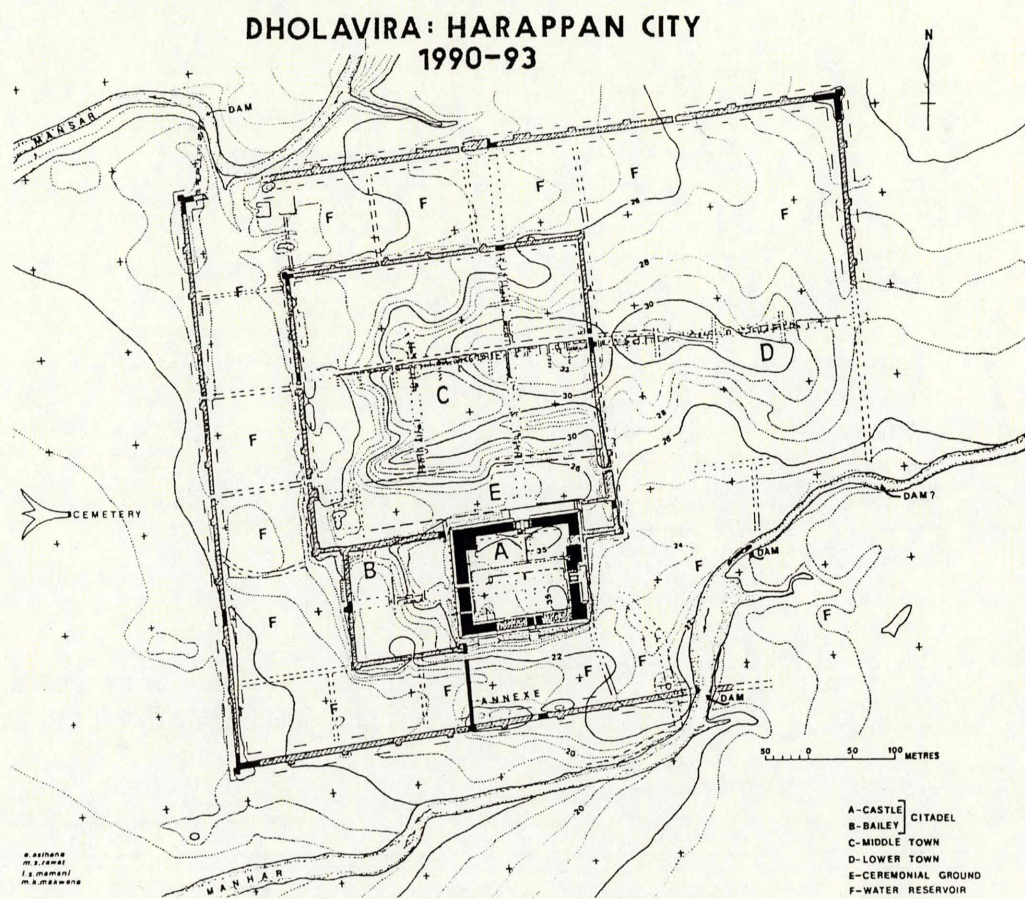


図12 ドーラヴィーラー遺跡 (Joshi & Bisht 1994)

ものである。サウラシュートラ半島は盛期ハラッパー期にもインド亜大陸と陸続きであった可能性が高いが、今より海が入り込み、ロータル遺跡と海とのアクセスも良かったと推定できる。これらの港町はインダス文明の繁栄を支えたが、後期ハラッパー期に海退による陸化が進んだことが、インダス文明衰退の一因と推察している。

ドーラヴィーラー (Dholavira) 遺跡：インド・グジャラート州カッチ地域の湿原に立地し、当地域最大の盛期ハラッパー期の遺跡である (図 12)。石組みの城壁で囲んだ地区は 100 ヘクタール弱であるが、そのかなりは、貯水槽が占めていて、居住域はカーリーバンガン遺跡 (12 ヘクタール) と同程度であるという (近藤 2004)。なお城壁や壁に石を多用することは、第 III 地域の特色であり他の地域では日干しレンガ・焼成レンガを使う。

ドーラヴィーラー遺跡は、城塞と都市部が一体となった構造をとるものであり、城塞のマウンドの北に近接して市街地のマウンドが存在する。城塞は馬出し状の 3 門をもち、建物が密集して排水施設を整備している。大型井戸も存在して、排水施設に水を流している。

市街地の中でも、城塞の北に隣接する地区を城壁で囲み Middle Town と呼ばれ、城塞の東北部の市街地が Lower Town とされている。市街地には格子状の道を整備して、建物や墓地があり、空地もある。

これら城塞・市街地の全体を方形の城壁で囲むが、この遺跡の周囲には岩盤をくり抜いた貯水施設が配列され、雨水を集めて循環させたことが推定されている。

Kanmer (カーンメール) 遺跡：インド・グジャラート州・カッチ地域に所在する盛期ハラッパー期と後期ハラッパー期を中心として営まれた遺跡である (図 13)。約 1.3 ヘクタールの城塞は内外二重の石積み城壁で囲み、北・東・西の 3 辺の城壁を確認している。その方位は真北から、北辺が西へ約 33 度、東辺が東へ約 29 度、西辺が東へ約 28 度振り、城塞東北コーナーは 86 度、城塞西北コーナーは 95 度をなす。東辺と西辺がほぼ並行し、ややいびつな平行四辺形となっている。門の位置は未確認であり、城塞の中には、日干しレンガと石を用いた壁で仕切った部屋が密集している。

現在、城塞の北には、乾期には涸川となる小河川が近接しており、城塞の北と東に盛期・後期ハラッパー期の土器が散布している。城塞の周辺にマウンドは確認できないが、10 ヘクタールを越える規模の市街地が存在した可能性が考えられる。

スールコータダー (Surkotada) 遺跡：インド・グジャラート州・カッチ地域に所在する小規模な型の盛期ハラッパー期の遺跡である (図 14)。ほぼ正方形で同規模である西の城塞と東の市街地とが接する構造をとり、建物が密集している。

城塞・市街地の北西部には、グジャラート地域特有の甕棺を用いた墓地がある。

ロータル (Lothal) 遺跡：インド・グジャラート州・パール地域に所在する、約 7 ヘクタールの盛期ハラッパー期・後期ハラッパー期の遺跡である (図 15)。

遺跡の西に接して旧河道が存在し、そこから遺跡の北に運河を引き込んでいた。遺跡の東には港または貯水槽と推定される長さ約 219 メートル、幅 27 メートル、深さ 4.5 メートルの焼成レンガを用いた大きなドック状施設があり、この運河に接続している。

Northeast Corner of Phase1 Wall

(Photogrammetric Elevation View, from North)

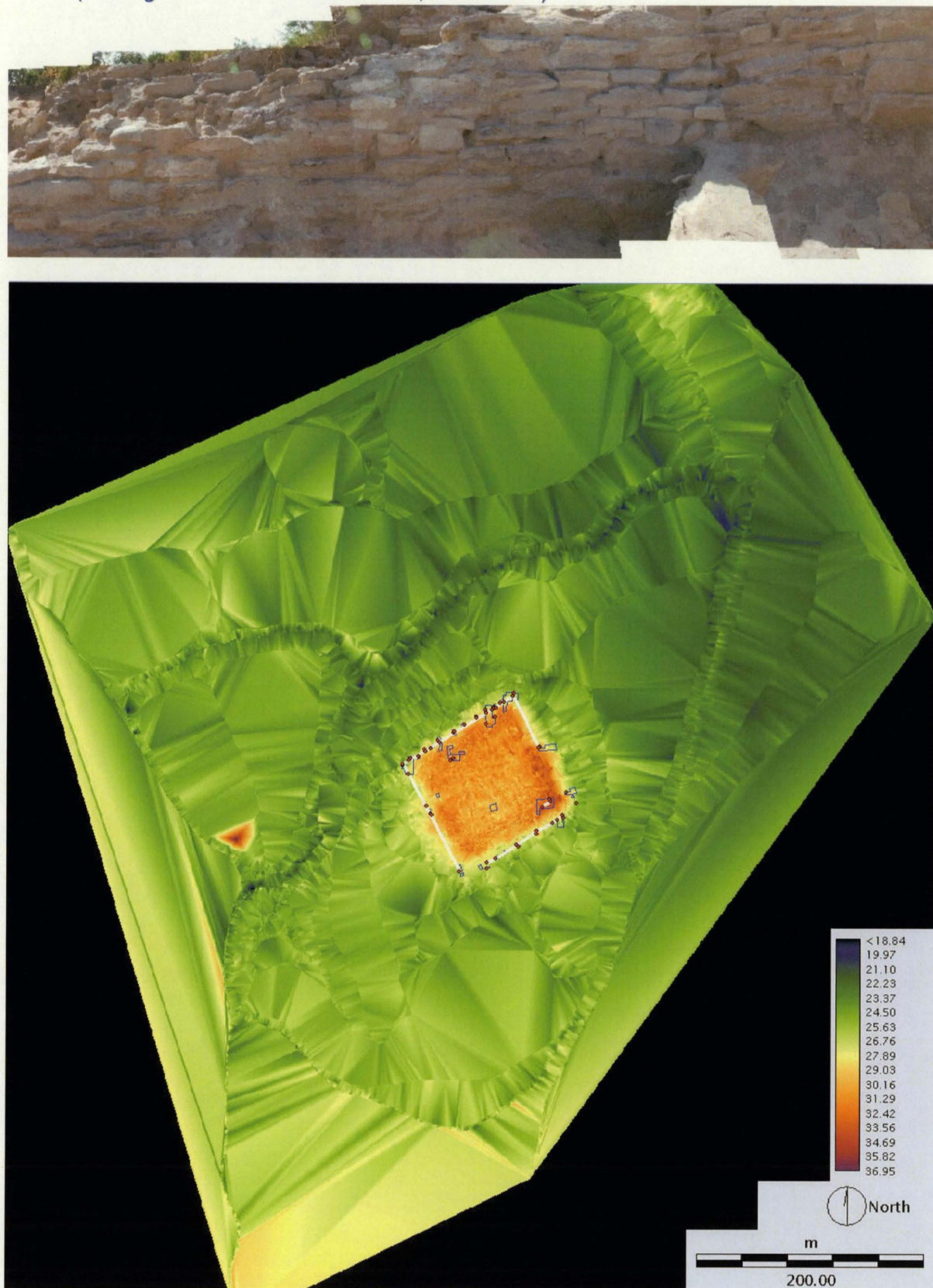


図13 カーンメール遺跡の石積み城壁と3Dモデル（宇野隆夫・寺村裕史作成）

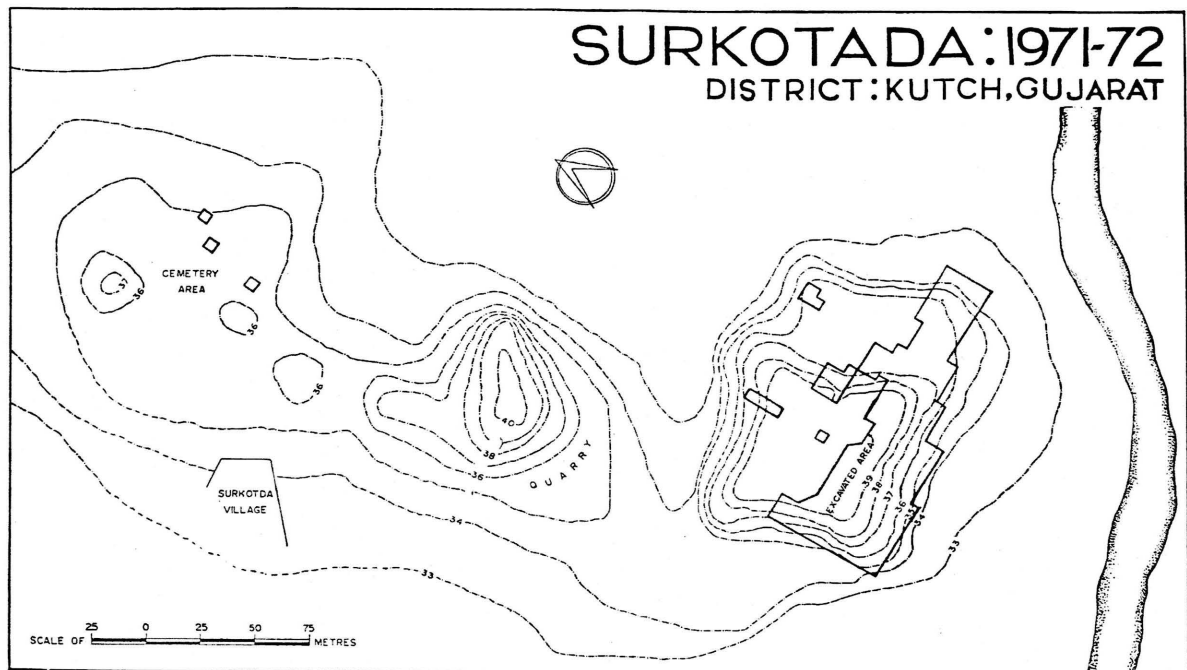


Fig. 3. Contour plan.

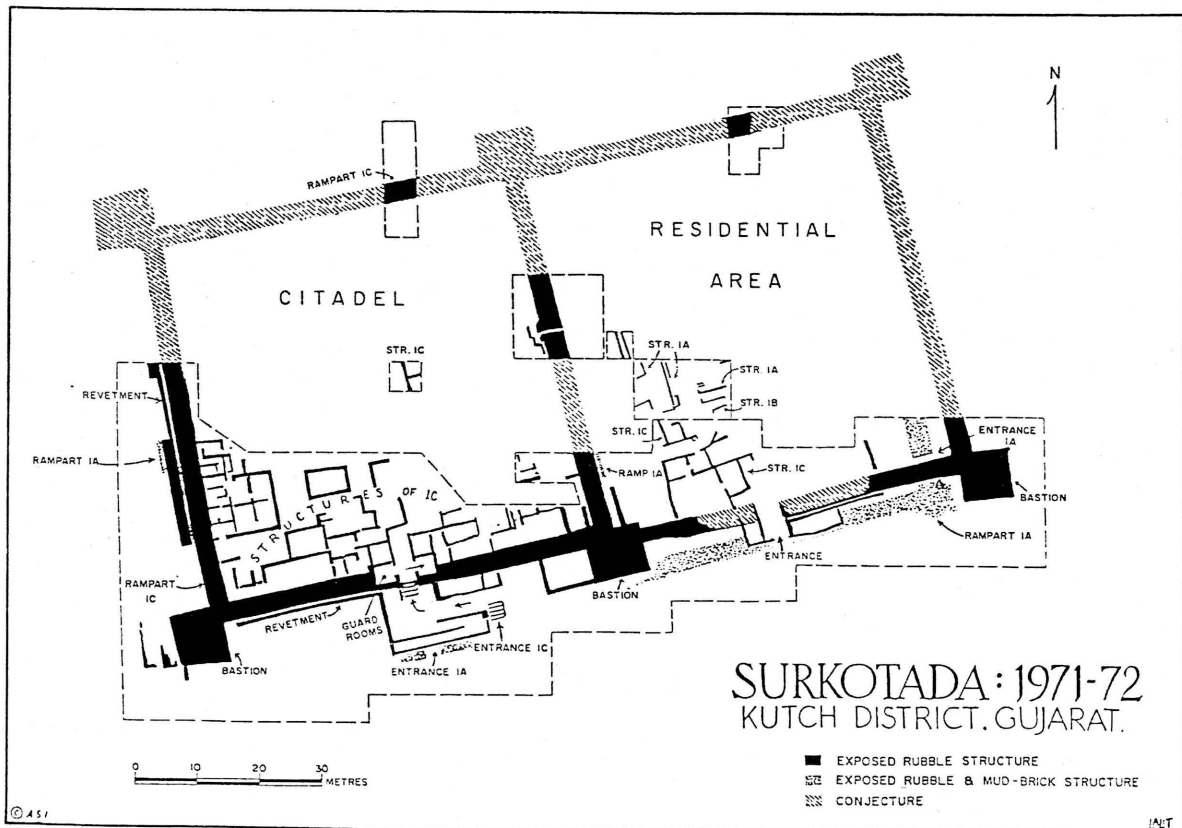


Fig. 4. Sketch plan of structures.

図14 スールコータダー遺跡平面図 (Joshi 1990)

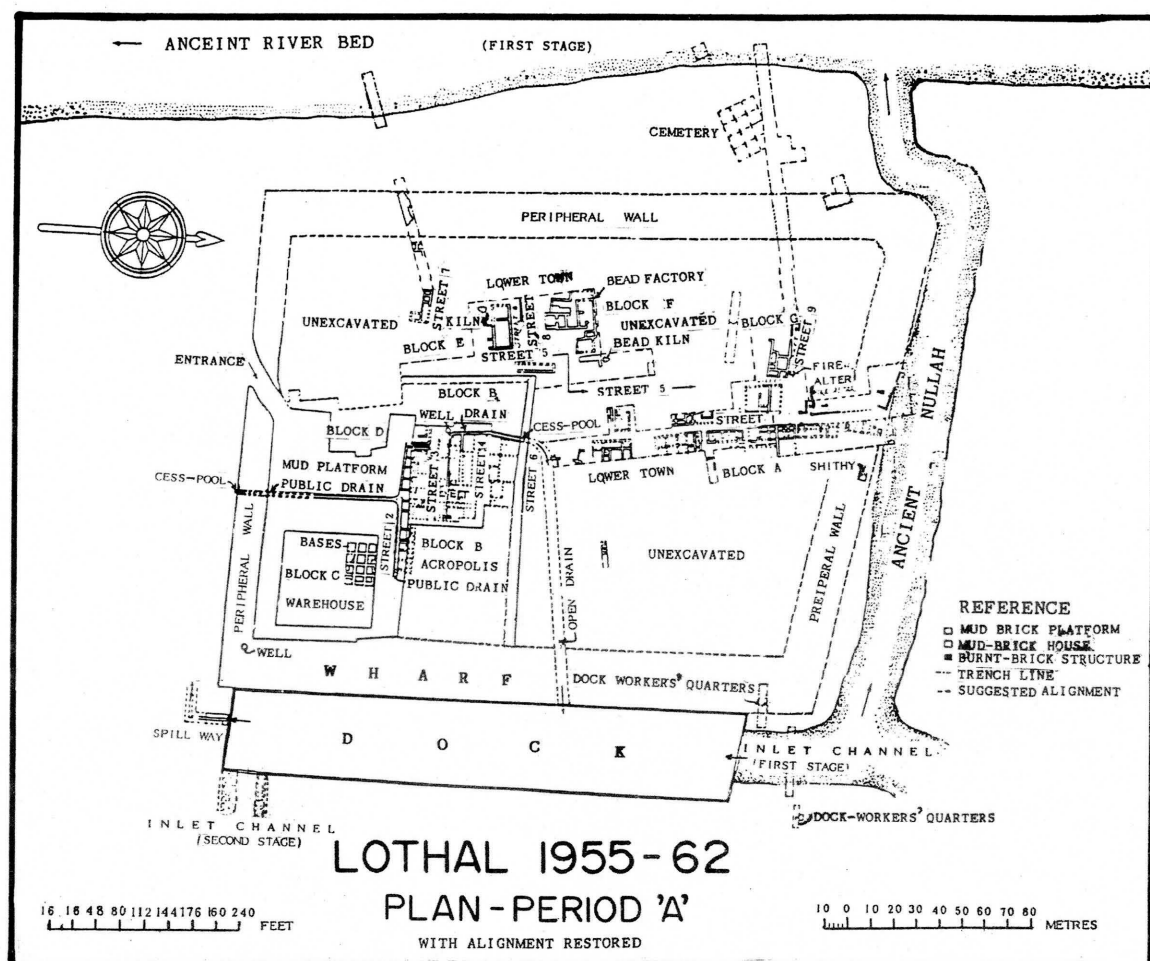


図 15 ロータル遺跡平面図 (Rao 1979)

遺跡の南東部には城塞があり、その北と西に市街地があつて、城塞と市街地を厚い城壁で一体的に囲む構造をとっている。市街地には、格子状の道路があり、ビーズの工房や火の祭祀跡が確認されている。

第 IV 地域

ラーキーガリー (Rakhigarhi) 遺跡：インド・ハリヤナ州に所在するインド側最大のインダス文明遺跡である。インダス川上流域とガンジス川上流域の中間の大平原の中に立地している (図 16)。この地域はヒマラヤ山脈からの豊富な伏流水によって地下水位が高く、現在もインド最大の穀倉地帯をなしている。

遺跡は南に接して旧河道があり、五つのマウンドからなっている (図 17)。RGR-2 マウンドが城塞であり、その東を中心として複数の市街地のマウンドや墓地のマウンドがある。

詳細は未報告であるが、街路、排水・貯水施設、銅・貴石の工房が調査され、金・貝装身具も出土している。

バナーワリー (Banawali) 遺跡：インド・ハリヤナ州の西部に位置するインダス文明期の中規模遺跡である (図 18)。南約 200 メートルの位置に、ガッガル・ハークラー川河床がある。城塞と市街地を囲む不定形であるが方形に近い城壁がある。ただし城塞が半球形であり、市街地の街路も格子状ではなく、独特のものとなっている。

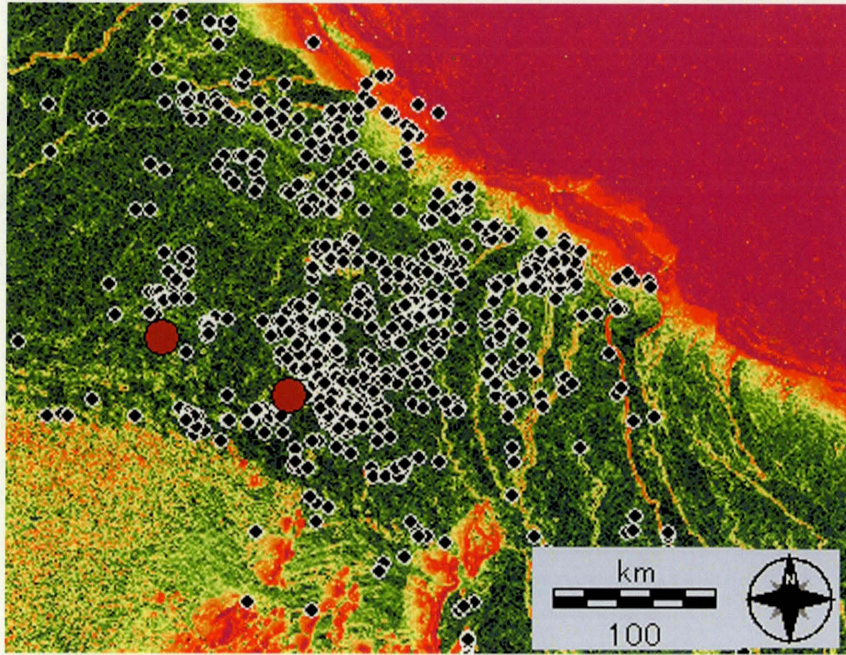


図 16 ラーキーガリー・パナーワリー遺跡の立地（右：ラーキーガリー，左：パナーワリー）

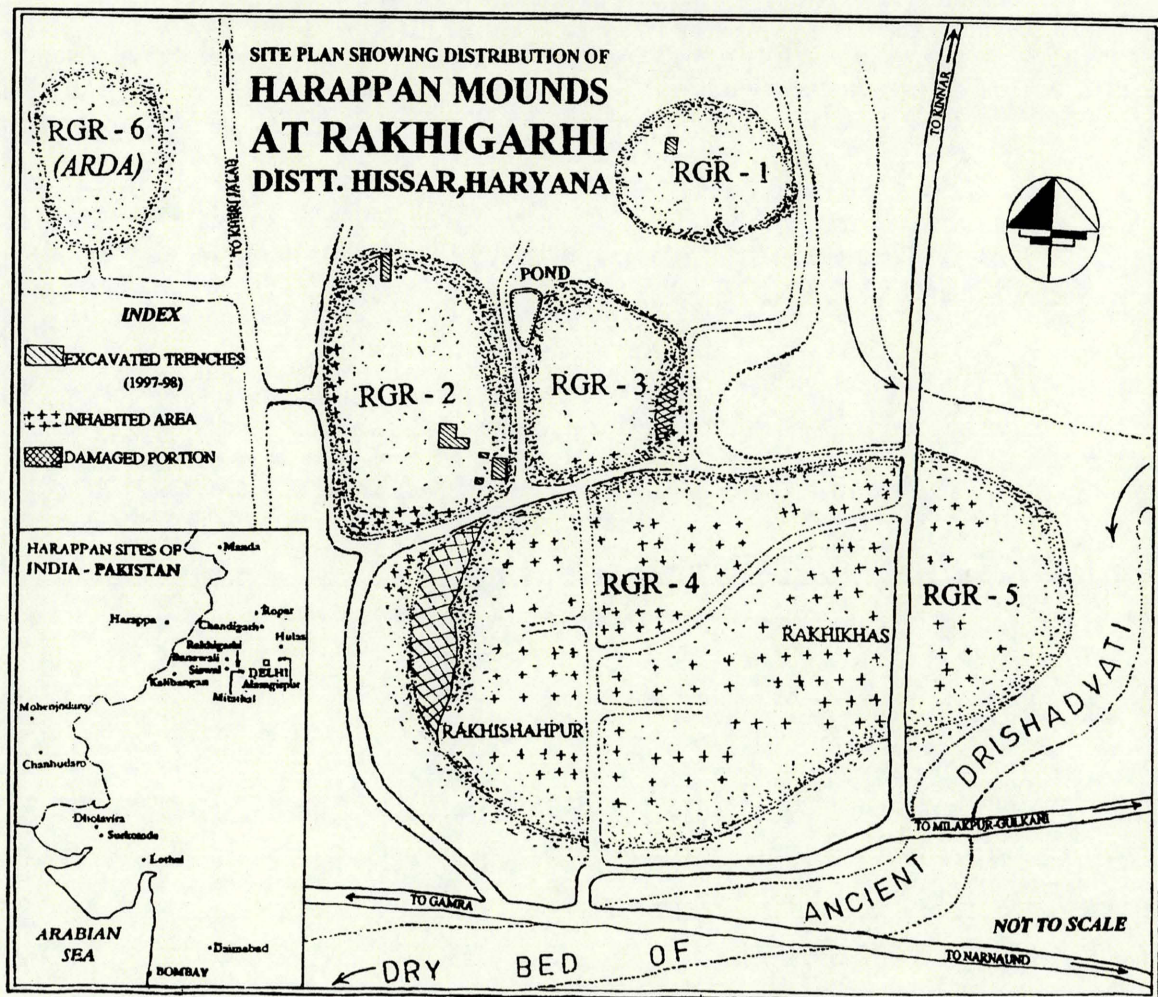


図 17 ラーキーガリー遺跡平面図（Nath 1998）

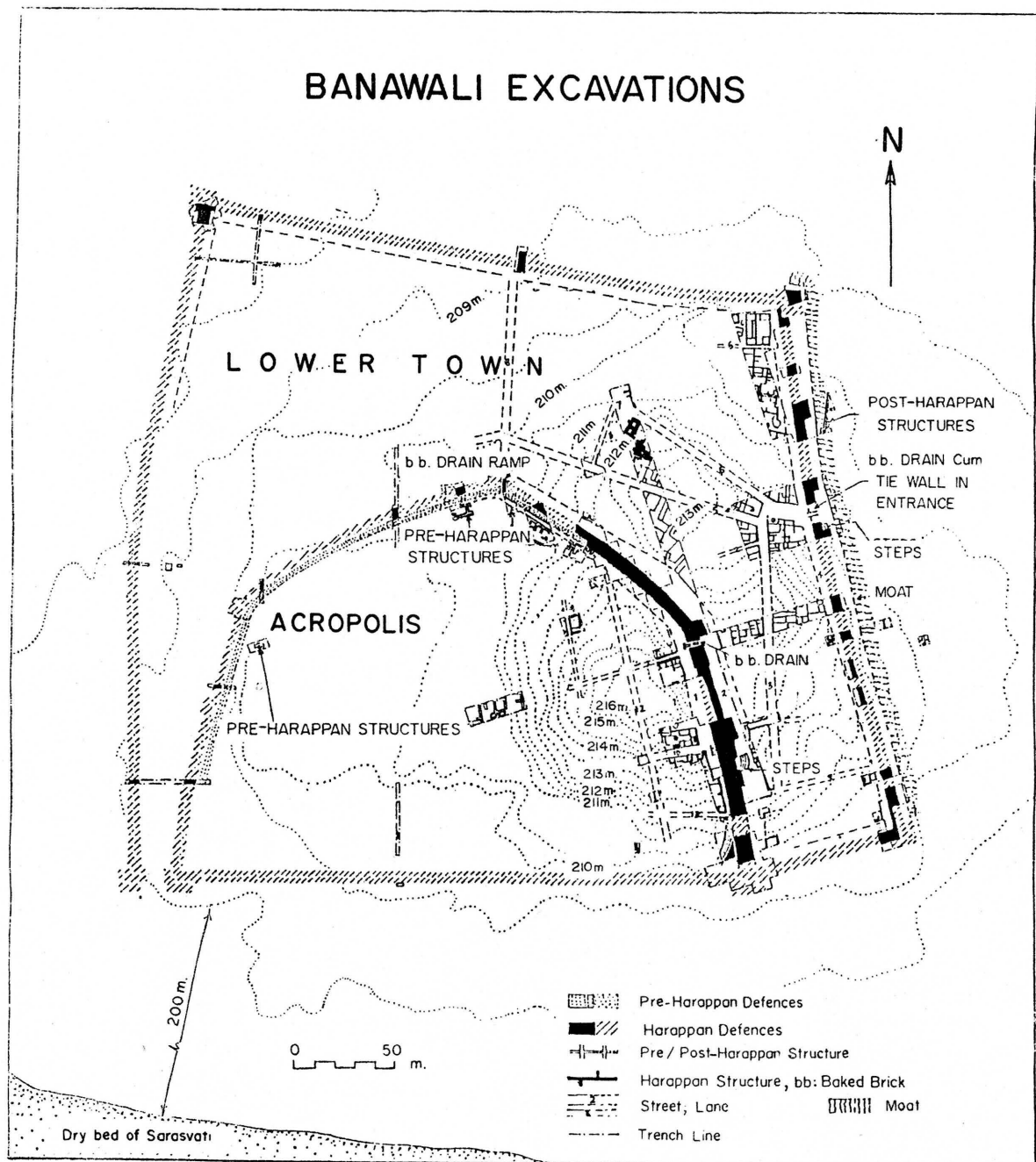


図 18 バナーワリー遺跡平面図 (IAR1987-88)

3 考 察

以上、現在までに知られている主なインダス文明の遺跡について、概説した。これらの相互の関係をj知るために、新石器時代から鉄器時代に至る当地域の遺跡分について、GIS 密度分布分析の結果を示す (図 19, Teramura and Uno 2006)。

インダス文明の最盛期である盛期ハラッパー期とは、当文明域の六つの地域のすべてにおいて遺跡が増加した段階 (Stage5) である。それ以前は遺跡分布が西から東・南へ拡大する段階、それ以後は遺跡分布の中心が東へ移動する段階であった。

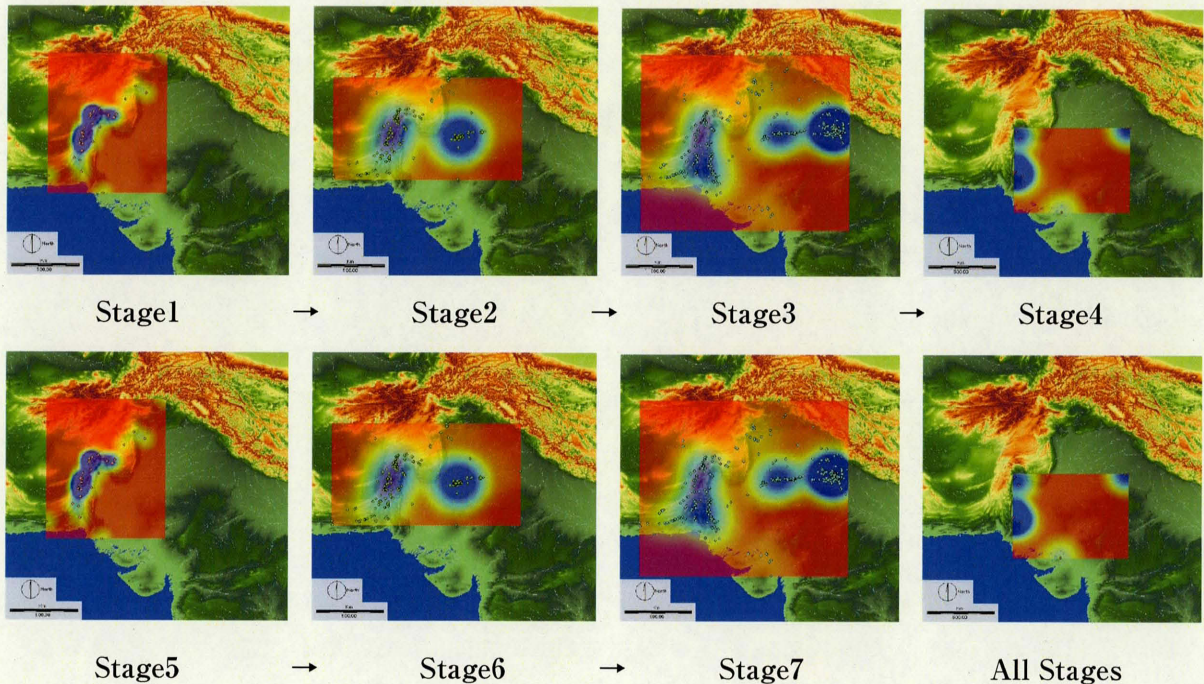


図19 インダス文明地域遺跡分布の推移 (Stage1:7000-4300BC, Stage2:4300-3200BC, Stage3:3200-2600BC, Stage4:2600-2500BC, Stage5:2500-1900BC, Stage6:1900-1000BC, Stage7:1000-600BC。Stage3が初期ハラッパー期, Stage5が盛期ハラッパー期, Stage6が後期ハラッパー期。Teramura and Uno 2006)

このことは、インダス文明の繁栄が、これら各地域社会の確立と、相互交流とによって、成り立っていたことを示唆している。その交流がどのような形でなされたかを考えることが、インダス文明都市の経営システムを考える基礎を提供するであろう。

インダス文明の範囲は広大であり、都市構造においても、文物の様式においても、一定の地域的特色が存在することが明らかになってきている。このことは逆に、インダス文明地域を通じて共通する特色がどのように形成されたかを考えることが重要であることを示している。

インダス文明都市の著しい特色は、方形の形・格子状の街路を採用したことにあると思う。とりわけ方形の形は同時代の西アジアや中国にはないものであり、インダス文明の都市は、世界最古の方形都市としての位置づけを与えて良いものである。城壁の方位からみて、真北方位や直角を正確に測量する技術はなかった可能性が高く、それらは基本的に、平行四辺形であるが、方形を指向して建設したことは確かである。バナーワリー遺跡のように半球形の城塞を築く特異な例はあるが、例外的あるいはインダス文明東辺の地域的現象と推定しておきたい。

インダス文明よりも後の時代の中国では、方形都市を多数建設したが、それは天円地方、すなわち天上界は円（ドーム）、地上世界は方形であると考えた宗教思想あるいは世界観に根拠したものであった。インダス文明においても、地上の世界は四角いと共通して認識されていたことが四角い都市を建設した要因であったと思う。

このことは印章の形が示唆しているであろう。都市が不定形な西アジアでは円形スタンプや円筒印章を使用するのに対して、方形都市を営んだインダス文明や中国では方形のスタンプ印章を用いて、好対照をなしている（図20）。印章には、神聖な図像や文字を描くのであり、そのキャ

ンバスは世界の形を表したと考えるのである。このような世界観がどのようにして共有されたかという視点で、都市構造を見直したい。そして世界観あるいは宗教観念が共有される場の第一の候補は、大型の建物や特殊な構築物を設けた城塞であり、第二の候補は交易の場であったであろう。

インダス文明の都市についてみると、ケノイヤーによる第1級都市（50ヘクタール以上）と第2級都市（10-50ヘクタール）の違いが非常に大きく、第2級都市と町（5-10ヘクタール）違いは小さい（Kenoyer 1998）。また村とされる1-5ヘクタールの集落にも都市的な構造のものがあり、慎重な評価が必要であると感じられる。

インダス文明都市の立地・構造・規模をみると、インダス川上流域のハラッパー遺跡、インダス川下流域のモヘンジョ・ダロ遺跡、インダス川・ガンジス川境界域のラーキーガリー遺跡という3遺跡が突出している。これらは大平原の中に立地する大遺跡であると同時に、城塞が市街地から独立して存在することが特徴的である。

世界的にみて、城塞（あるいは神殿や王宮）と市街地を分離する場合には、城塞を防御に適した高所に配置することが大多数であり、大平原で城塞と市街地を分離することは異例であると言って良い。その堅固な城壁は、軍事的目的よりも特別な隔絶した空間を作ることにより意義があった可能性が高いであろう。

これらの大遺跡では、複数のマウンドや平地部の地区からなる広大な市街地をもつが、城塞の機能は市街地の人々だけのための場であったのではなく、周辺の集落を統率するような多くの人々が集まり、儀礼に参加する場であったことが、城塞と市街地とを分離した一因と推察する。これらの大型で複雑な構造をとる遺跡を、インダス文明の都市（大都市）と位置づけたい。

なお以上の遺跡と同様に城塞が市街地から分離するが10ヘクタール級と小規模なカーリーバンガン遺跡の城塞も、大都市のそれと同様の機能をもったであろう。ただしこの遺跡は第III地域の遺跡の分布域の東端にあたる丘陵裾に立地し、その領域が広いものではなかったと推定できることが、規模の小ささとが対応するであろう。このクラス（10ヘクタール前後）の遺跡を、町（中小都市）と位置づけたい。

これらに対して、海辺のインド・グジャラート州域では、ドーラヴィーラー遺跡やロータル遺跡のように、城塞と市街地が一体となっていることが特徴的である。これらの遺跡は海水面変動シミュレーションによると、インダス文明期には海へのアクセスがよく（Teramura and Uno 2006）、港町の型を示していると推察する。このような遺跡における手工業製品やその原材料の活発な広域流通も、このような遺跡の性格を示唆しているであろう。その市街地には在地の人々だけではなく、交易に携わる多くの人々が行き交ったであろう。そしてこのような港町ではより国際的であったであろう市街地に城塞が隣接して、両者の関係を強めることが重要であったものと思う。

なおドーラヴィーラー遺跡の範囲が100ヘクタール級であることを重視するなら、これを都市（港湾都市）と評価することも可能であるが、その全体が居住域ではないことから、現状では港町と理解しておきたい。またカーンメール遺跡も、将来、城塞に接して市街地が存在することが明らかになれば、港町の型に含まれるであろう。16ヘクタールのバナーワリー遺跡は、ガッガル・ハークラー川の上流域に立地し、川港町の可能性があると考えるが、約200メートル離れた河床



図 20 インダス文明の印章（モヘンジョ・ダロ遺跡，NHK 編 2000）

との間の運河の有無など，その検証は将来の課題である。

スールコータダー遺跡は，上記の港町と共通する城塞・市街地一体型の構造をとるが，5ヘクタール未満と規模が小さく，評価が最も難しいものである。将来，インダス文明の一般的な集落がこのようなものであると判明すれば，それを村と評価して良いであろう。ただしもっと小規模な集落が主流であったなら，スールコータダー遺跡のような存在は，それらの結節点として評価する必要があるであろう。その整った構造から，後者の可能性が高いと推察するが，その検証は今後の課題である。

結 び

以上，インダス文明の都市について，その立地・規模・構造から，都市・町の枠組みを再検討して，城塞・市街地分離型の都市（大都市），都市と同様の構造をとりつつ規模がより小さい町（中小都市），および城塞と市街地とが一体となった港町を抽出した。

そして大平原に立地する都市において城塞と市街地とを分離するという特異性を重視して，城塞をインダス文明の世界観を共有して経営の仕組みを作り出す隔絶した空間であったと推定した。井戸・導水・貯水施設や火を使った祭祀跡の存在から，それは水や火を用いた宗教儀礼の執行という形をとったものと推定できる。港町の城塞も同様の機能をもち，ここでは隔絶性より，より国際的な市街地を掌握することが重要であり，城塞・市街地一体型の構造をとったと推察した。

このようなインダス文明の都市に関する推定が大過なければ，それは王権という視点からはどのように評価できるであろうか。王権を特定個人の卓越した権力あるいはそれが継承される王朝と認定するなら，そのような王権はインダス文明の中で確認することは難しく，将来発見される可能性も少ないであろう。他方，宗教的観念の共有に根ざした諸都市の連合体制も王権の一つの

在り方であるとするなら、それはインダス文明に適合的である。

インダス文明は、旧大陸青銅器時代の一つの社会類型になると推定するものである。青銅器時代の社会は多様であり、私は少なくとも三つの型があったと推定している。メソポタミア・エジプト・中国（夏商周）文明のように都市と王朝が存在したもの、インダス文明のように都市が発展するが王朝の存在を確認できないもの、ヨーロッパ青銅器時代のように都市とは別の形で社会発展がなされたものである。なおインダス文明型の都市の端緒は新石器時代にあり、人類史における最初の都市形態であったと予察している。

謝辞：本稿は、私が参加する総合地球環境学研究所インダス・プロジェクトの成果に依拠したものである。プロジェクト代表の長田俊樹氏ならびに、寺村裕史氏、上杉彰紀氏、小磯学氏に心よりの謝意を表する。

本稿を、2007 年度をもって、つつがなく退職される今谷明氏に、日頃よりの多大な学恩とご厚意に対するささやかなお礼として、献呈する。

（参考文献）

- 小磯学 1998「都市の形にみるインダス文明の地域性」『網干善教先生古稀記念考古学論集』関西大学考古学研究室。
- 小磯学 2004「モヘンジョ・ダロ建物再考」『古代インドの都市像を探る』関西大学国際シンポジウム資料集。
- 近藤英夫編著 2000『四大文明 インダス』NHK 出版。
- 近藤英夫 2004「インダス文明の最近の理解—都市類型に注目して—」『古代インドの都市像を探る』関西大学国際シンポジウム資料集。
- NHK 編 2000『世界四大文明 インダス文明展』。
- Osada,T. et al. 2007, Linguistics, Archaeology and the Human Past, Occasional Paper 2, Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto.
- Joshi, J.P. ed. 1990. Excavation at Surkotada and Exploration in Kutch, Archaeological Survey of India, New Delhi.
- Joshi, M.C. ed. 1993, Indian Archaeology 1987-88 - A Review, Archaeological Survey of India, New Delhi.
- Joshi, J.P. & R.S. Bisht, 1994, India and the Indus Civilization, National Museum Institute, New Delhi.
- Kenoyer,J.M. 1998, Ancient cities of the Indus Valley Civilization, Karachi.
- Meadow, R.H. and J.M. Kenoyer, 1997, Excavation at Rangpur and other explorations in Gujarat, Ancient India, nos. 18 & 19, Archaeological Survey of India, New Delhi.
- Nath,A. 1998, Rakhigarhi: A Harappan Metropolis in the Sarasvati-Drishadvati Divide, Puratattva, 28, Indian Archaeological Society, New Delhi.
- Possel,G.L. 1999, Indus Age The Beginnings, University of Pennsylvania Press, Philadelphia.
- Possehl, G.L. 2002, The Indus Civilization A Contemporary Perspective, Interim Reports Vol.1, Vistaar Publication, New Delhi.
- Rao, S.R. 1979, Lothal - A Harappan Port Town (1955-62), Vol. I, Archaeological Survey of India, New Delhi.
- Sharma, A.K., 1999, The Departed Harappans of Kalibangan, Sundeep Prakashan, New Delhi.
- Teramura,H. and Uno,T. 2006, Spatial Analyses of Harappan Urban Settlement, Ancient Asia, Vol.1, Society of South Asian Archaeology, Mumbai.

City and Kingship in Indus Civilization

UNO Takao

International Research Center for Japanese Studies

In the twentieth century, we thought of early urbanization as a single phenomenon that was achieved on the Eurasian landmass in the Bronze Age. It is clear now, however, that there were three types of social development in the Bronze Age. These were (1) the Western Asian and Chinese type, in which cities were established along with monarchical dynasties, (2) the Pakistani and Indian type, in which we cannot confirm the establishment of monarchical dynasties but even so cities were established, and (3) the European type, in which social development occurred in patterns that can be differentiated from the formation of cities and monarchical dynasties. In this paper, I would like to focus on the second type of urbanization, that is, Indus civilization.

Indus civilization flourished in the western part of what is today Pakistan and India in the third millennium BCE. Its domain was very extensive, but the topography of that domain was relatively simple, consisting of the Indus plain, the hilly land surrounding that plain, and the coastal areas along the Arabian Sea. We can identify six groups of Indus civilization sites, based on topographical and environmental features and their distribution. It was in the era of Indus civilization that all of these groups prospered.

The cities of the Indus civilization were made up of citadels and “lower cities” (town areas), and they had square or parallelogram-shaped walls. These are oldest square urban sites in the world. The stamp seals that were used there were square, also. From this we might infer that the cosmological view shared by these cities held that the world was square.

The Harappa, Mohenjo-daro, and Rakhigarhi sites are large, 100-hectare-class sites located in the central part of the Indus plain. In all of them, the citadels and lower cities are separated from each other. Militarily, in a location in the middle of a large plain, such a separation of fortress and town is disadvantageous. I think it likely that ceremonies were conducted in the isolated space of the citadel by those who shared the same cosmological view. From finds of wells, watercourses, reservoir ponds, and dams, we can suppose that these ceremonies were religious rites that used water and fire. These sites were the cities of the Indus civilization, but there are also town sites, around 10 hectares in scale, that have the same structure as these cities.

The structure of the coastal sites Dholavira and Lhotal is unlike that of the central plains cities, in that the citadels and lower cities are integrated with each other. In the town areas, we can suppose, international merchants exchanged their wares, and the fortress controlled such activity. These were the port towns of Indus civilization.

Although a fully developed urbanization was achieved in Indus civilization, we find no royal palaces or tombs of kings, nor were weapons developed. Likely it was a federation of cities sharing common religious and cosmological notions that embodied the “kingly authority” of Indus civilization.